

子どもを信じて

私が幼稚園に赴任して、今年、四度目の春を迎えました。一年目は四歳児の副担任、翌年は三歳児の担任をさせていただくことになりました。そしてその子どもたちと三年間、同じ時を過ごすこととなりました。

三年前の春、初めての担任、初めての三歳児ということで期待と緊張で胸がいっぱいの中、子どもたちとの園生活がスタートしました。四、五月があつたという間に過ぎ去り、子どもたちが少しずつ保護者から離れて遊べるようになっていく中で、いつころにお母さんの腕から離れようとしないうちがいました。

香田成美
(佐賀大学文化教育学部附属幼稚園)

本園では、子どもが保護者にそばにいてほしいという時には、できる限り園に残っていたいただき、子どもの要求につき合ってもらおうようにしています。この子(以下、A児)は母親との会話や遊びは楽しんでいましたが、私が話しかけるとすぐに母親の後ろに隠れていました。母親は多少の不安もお持ちだったはずですが、他の保護者が次々に帰っていくのを明るく見送って、A児のそばにずっと寄り添っていらっしやいました。それでも用事があってどうしても母親が帰らなければならぬ時は、私が泣き叫ぶA児を一日中抱いて、一緒にウサギにエサをやった

り、粘土や砂場で遊んだりしました。

そうするうちに母親といる時間と私といる時間が半々になっていきました。そしてある時、母親が「成美先生、Aをよろしくお願いします」と笑顔でA児を抱いて連れてこられたので、「はい。わかりました」と私も笑ってA児を受け取ると、A児はとてもうれしそうにニコニコと母親と別れることができました。その日から、毎朝、このやりとりをするようになってきました。それからは母親の代わりに私を慕ってくれるようになり、さらには私から離れて友達と一緒に遊べるようにもなりました。ただ、お弁当の時だけは、私が隣に行くまで、いくらおなかですいていようと、絶対に弁当箱を開こうとはしませんでした。毎日毎日A児の隣で食べるのは、誘ってくれるほかの子にも申し訳なく思い、時にほかの子と食べると、降園まで拗ねて黙ったまま保育室に入ってきてませんでした。そんなA児に、困ったなあと言いつつも、私を慕ってくれることがうれしくもありました。

相変わらずお弁当は一緒に食べていましたが、時がたつにつれ、A児はいろいろな友達とかかわって遊ぶようになり、どの子にも慕われる存在になっていました。

A児は実はとても活発で、友達のことをよく気遣う優しい子でした。なかなか友達とかわりが持てずにいたB児のこともよく気に掛け、声を掛けていました。誰とでも一緒にいられるわけではないB児でしたが、A児には特別な安心感を抱いていたように、二人でゆったり遊んだり、保育室の隅で私と三人でよくお弁当を食べたりしていました。

B児は少々神経質で頑固な一面を持った子どもでしたが、入園当初は何事もなく楽しそうに園生活を送っていました。しかし周りの友達関係が出来始めると、取り残されたような気持ちが生じたのか、「自分でできないこと」に敏感になり、できないことに直面するとかんしゃくを起すようになりました。

特に、「上手にお弁当を食べられない」「友達に見られたくない」と言つて、クラスで一緒にお弁当を食べることを拒むようになりました。

本園のお弁当の時間は、保育者が援助しながら自分たちで机を並べ、好きな所に椅子を持っていつて座ります。その日、仲良く遊んだ友達と誘い合つて一緒に食べる事が多く、なかなか決まらなかつたりいざこざがあつたりと一苦労しながら、やつこの思いでお弁当を食べます。友達と誘い合つてというところに、B児がお弁当の時間を嫌がる原因があつたのかもしれない。けれども、その一苦労を私たちは大事にして、B児にもその山を乗り越えてほしいと願つていました。しかしB児は、保育室にみんなが集まるお弁当や降園時、園行事の際には目に涙をいっばいためて固まつていたり、奇声を上げて泣いたりするようになりました。B児の辛そうな姿に私も胸が締め付けられる思ひでした。どうしてあげればよいのか……と悩むばかりでしたが、そんな時、「保育者が子どもをどうにかしてあげようなんてお

こがましい」という副園長の言葉を思い出しました。私たちが何とかしようとしなくても、私たちが子どもをしつかり理解し寄り添つていけば、子どもは自分でそれを乗り越えていく力を持つているということです。副園長はいつでも「大丈夫よ」と温かく私や子どもたちを見守つてくださっています。私には周りの先生方の大きな支えがあることを改めて感じ、安心してもう一度保育に向かうことができました。

B児がみんなと食べたくなければ、別の所で食べようと誘つてみることにしました。床で食べたり、おままごとコーナーで食べたり、テラスだったりしました。秋が過ぎ、冬が過ぎてまた春が訪れようとするころ、ホールに出したB児の大好きなお雛様の前に座つて食べることがありました。何日かそれが続くと、B児をうらやましがると、結局長いホールで食べることになつてしまいました。みんなで食べることをB児が嫌がるのでは？と心配しましたが、B児と一緒に食べる仲間が増え

たことを喜んでいました。B児の一步成長に私も喜びつつ、このまま毎日ホールで食べるわけにもいかないと考えていたところ、ちょうど保育室でレストランごっこが盛り上がったので、お弁当の時間も「もも組レストラン」としてご飯を食べることにしました。B児も喜んでシエフになりきり、参加しました。絶対に皆とは食べないと拒んでいたB児も、ホールでの食事やレストランごっこを通して、友達と一緒に食べる喜びや楽しさを感じることができたようです。

このような形で三歳を修了し、B児は四歳に進級しました。新入園児も加わったの新しい環境でしたが、三歳での出来事は何もなかったかのように、保育室に入ってお弁当を食べ、二学期には友達の輪の中に積極的に入ってお弁当の時間を楽しむようになりました。一方のA児も、友達が「先生食べられない」と甘えているのを見て、「Aちゃんもね、もも組の時はね、お弁当全然食べなかったけどね、今は

ちゃんと食べられるんだよ」と得意気に言い、あつという間にお弁当を食べ終わって遊びに行きます。

このような子どもたちの成長を通して、私に必要なことは、やはり子どもたちを信じて、あるがままの姿をしつかり受けとめ、支えることなのだと認識しました。また、鯨岡峻先生の『保育・主体として育てる営み』（ミネルヴァ書房 二〇一〇年）の中にも「子どもはいまのあるがまま（『ある』）をしつかり受け止めてもらえれば、その喜びと自信を背景に、必ずやその『ある』を乗り越えて、目の前の大人のように『なる』ことへ自ら向かいます。」とあります。私はこの言葉を胸に、子どもたちが安心感や信頼感を持って主体的に物事に取り組んでいけるような保育ができたらと思います。子どもたちにとって、かけがえのない幼稚園生活になるように、一緒に笑って時には泣いて、残りの一年間を大切に過ごしたいと思えます。